

世界遺産所在地における観光振興のあり方に関する研究

小室 充弘 主任研究員

1. 研究の背景および目的

観光振興は地域創生の極めて有効な手法であるが、近年、観光資源として、ユネスコの世界遺産が大きく注目されている。

確かに世界遺産登録を契機に観光客が急増するなど明るい報道がなされている。

しかしながら、世界遺産が長期的に当該地域の観光振興に寄与しているかについては、検証が必要とされるところである。

その一方で、観光客の増加により、世界遺産の保全や住民の生活環境に支障が生じていないかも懸念される。

本研究では、こうした問題意識を踏まえ、

①世界遺産観光についての実証分析

- ・ 特定の世界遺産のケーススタディに基づく世界遺産観光の評価分析

②実証分析の補足

- ・ 有識者・旅行業界関係者の知見の把握

③世界遺産を活用した持続的な観光振興に関する課題と対応策の整理を行うものである。

2. 重点研究対象の絞り込み

1) 世界遺産の類型化

日本国内に存在する19件の世界遺産について、登録後の観光客数の変化により、

- A : 登録により観光客数が急増
- B : 登録後も堅調に推移又は下げ止まり
- C : 登録にもかかわらず減少

の3タイプに分類する。

その上で、政策提言の有用性からAタイプ遺産（屋久島、白川郷、石見銀山、富岡製糸場等）に焦点を当てることにした。

2) ケーススタディ対象の選定

Aタイプ遺産の長期的な観光需要動向を見ると、一定の期間経過後は減少に転じており、しかも登録からピークまでの期間は短くなっている。

本研究では、ピークまでの期間が特に短い二つの遺産（石見銀山＝山間部立地、富岡製糸場＝市街地立地）をケーススタディの対象に選定し、その比較分析を行うことにした。

3. ケーススタディ

石見銀山のケーススタディについては、昨年の研究報告会で発表した、今回も骨子を報告する。地形的な制約から観光客の受入容量は少なく、遺産保全、住民生活の保全を重視しつつ、如何にして長期・安定需要を確保するかが課題である。

富岡製糸場のケーススタディは、2015年秋から2016年春にかけて、新たに実施したものであり、供給側の意識調査として、地方自治体ヒアリング（富岡市＋群馬県）、その他の地域関係者インタビュー（まちづくり会社、NPO、地場の旅行会社）を、また、需要側の意識調査として、製糸場来訪者アンケートを行った。

研究報告会では、その結果を詳細に発表するとともに、石見銀山との比較も提示する。

4. 実証分析の補足

有識者、旅行業界関係者に対してインタビュー・ヒアリングを行い、世界遺産登録と観光振興の関係、観光振興と遺産保全の関係、さらに、世界遺産のインバウンド観光への活用に関する知見を把握・整理した。

5. 持続的な観光振興に関する課題と対応策

ケーススタディの結果をベースに、有識者等の知見も参照しつつ、世界遺産所在地における持続的な観光振興に関する課題の抽出と対応策の検討を行った。

市場規模を勘案し、国内観光客の誘致に重点を置きつつ、メジャーではない観光地が世界遺産登録により喚起された需要を安定的に維持するための方策として

- ①地域の関係者による観光マネジメント
 - ②観光地としてのライフサイクルを見据えた対処
 - ③長期・安定的な需要の確保に向けた戦略的取組みの具体例
 - ④観光振興と遺産保全等の調和に向けた戦略的取組みの具体例
- について提示する。